

落葉

翻刻・解説 吉川仁子

一、

朝、何時もの時間に、京子は家を出た。五六間行つた所で、後から誰か声をかけた。京子は立止つて、振返つた。N子だつた。彼女は畳んで持つてゐた蝙蝠傘を上げて合図して、急いで来た。

「何だかはずきりしないお天気ねえ」

「用意にこれを持つて来たんですけど、大方雪になりさうな模様ですわ」

N子は歩き歩き、蝙蝠傘の先で、一寸土をたたいて、空を見た。二人は話しながら、列んで歩いた。

N子はふつと、

「山崎さんのお家のこと、あなたもうお聞きになつて？」と言出して、くすくすと笑つた。ふだん生真面目な彼女な

ので、そのことが、少々京子の好奇心を動かした。

「近頃はない珍しいお話があるんですのよ」

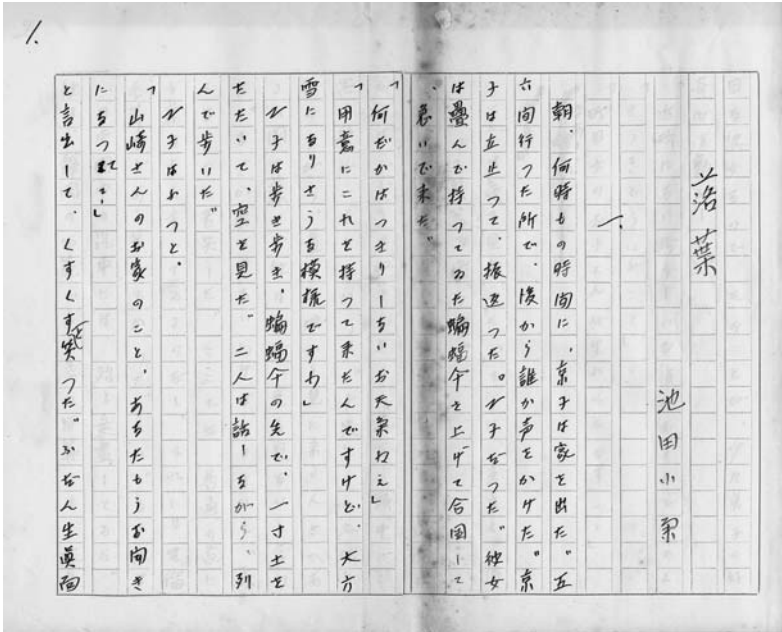
「さう？ どういふこと」

「昨日女の子さんが生れたんですつて」

「まあ！」

二人は顔を見合せた。そして、京子も一緒になつて笑つて終つた。

彼は彼女達の、直ぐな監督者だつた。還暦までには、もう三四年もあるのだが、頭中に、黒い髪が一本もなかつた。十幾年この土地に住みながら、遠い土地から見に来る人さへある公園の藤を、彼はまだ一度も見ないと言つた。まさか鹿は見ないわけはあるまいと、或人は言つて苦笑した。ここでは、普通の道にも鹿はよく歩いてゐるのだし、それには無論季節などある筈がなかつた。それでゐて彼



は、日本國中の汽車には、殆ど乗盡してゐた。彼は、静岡の師範でも千葉の師範でも、校長を勤めて、この主任になつて来たのだつた。彼の半生は、自由主義の教育の建設に消された。その結果が、ここに來て花と咲いた。京子は、彼の蓄が、ぼつと綻びかけた時に、ここに來た。彼とはもう丁度五年になつてゐた。その間に、教育雑誌と子供雑誌が、續いて創刊された。新しい製作室が建増されて、動力が取りつけられたり、學校は日に日に、工場に近づいて行つた。教育雑誌は、二年程の間に、同じ種類のどの雑誌よりも、多く賣れ出した。それが賣れると、自然彼等の(彼女達は別として)著書がよくはけた。そして彼等は、各地からどんどん講演に招かれた。その年の夏休み中の旅行地報告表によると、男で講演に出かけないのは、一人もなかつた。多いのは、四十二日の休み中に、二十ヶ所近く飛廻ることになつてゐた。それには、山崎が第一に数へられた。彼の三人の男の子は、上は大学に、中は高等學校に、末は中学にゐた。しかし彼は、妻や子供を持つてゐる人のやうではなかつた。家でも、洋服の上衣を脱いだ上に、着物を引つけてゐるのだといふ話があつた。白髪が伸びると、彼はくりくり坊主に散髪して來た。妻君にバリ

カンをかけさせるのだと言ふ話もあつた。それは本當かどうか、盆窪に長いのが残つてゐたり、所々不揃になつてゐたり、却つてぢぢ穢くなつて来ることは事實だつた。仕事と仕事、鎖のやうに続いて、きまりよく喰べて眠つて起きることを、彼は自慢にしてゐた。その調子で、怠ける者や弱い者に、始終下卑な皮肉を浴せた。部下の者が、寒稽古の納會に、十二里の徒歩競争をやるのに参加して、彼は人並に到着奥についた。眞蒼になり、生汗をかいて、ふいふいしてゐる様子は、傍から見ても、勇ましくも美しくもなかつた。それでも彼は、負けてはゐなかつた。写真を撮ると、彼は決つて、いかにも優しい爺さんにうつつた。だが、彼の傍に子供がゐたりすると、妙に似つかなかつた。その彼が、これから赤い裏のついた着物や、リボンのついた帽子を見て暮らすのだと思ふと、珍らしくもあり、興味深いことに思はれた。

「健三さんは幾つか知ら」

「あの子は中学二年ださうですから、十四、十五年目に出來たつてわけね」

「女の子とは、でも神様もなかなか氣の利いたお匙加減ぢやないの」

「少しや變るでせうか」

「いくらか冥加はあるでせうね。それにあの人も、これからだんだん歳をとつていくことだし」

「……………」

「それはさうと、この二三年何だか大勢出来るやうに思はない？」

「今年はこれで十三人目だとか、m子さんが言つてましたよ」

「さう、そんなに大勢？」

「どういふ現象なんでせうね。何だかハ、ハ、ハ」

「掲示板の端に、ちよつちよつと掲示の出る度、何か面白いことには思つてたんですけど」

彼女達は、門を這入つた。玄關には、その日も赤いのや黒いのや婦人型のや、いろいろな靴が一杯に列べてあつた。脇の方には、下駄も三十足程列べてあつた。その二三年、年々二万人近い參觀人が、押寄せて來てゐた。そのために、大きな下駄箱が新調されたのだが、這入りきらなかつた。一番よく集る五月六月の頃には、廊下のあたり、浅草か千日前かと言つた感だつた。それが遠慮なしに、どんな教室へ詰めかけて來るのだつたから、堪らなかつた。

人氣者の受持つてゐる教室のあたりは、部屋からは、み出された人々が、廊下の窓に登つて、見てゐた。名の知れた土地では、それぞれ慎しみのある管の人々だのに、さうして集ると、随分目に餘ることを、平氣でやつた。さういふ中では、眞味な仕事が出来ないと、彼女達は、そのことを甚しく氣にしてゐた。

「ほら、今日もまた早朝から列んでるわ」

二人はつきあつたやうに、立止つた。

「いやあねえ」

N子はしかめ面を京子に向けて、

「これが今に、一足も列ばない時が来るつて」

と、附加へた。

著書も持たないし、講演にも招かれぬ彼女達は、集ると、彼等のその騒ぎを、浅間しいことだと話合つた。斯う有頂天になつてゐたのでは、二年と経たないうちに、学校の火が消えると言つた。殊に彼女達は、その頃だんだん不景氣になりかけてゐた子供雑誌のことを、非常に苦に病んでゐた。物の解らない教師共が、やたらに味も臭もない學習ものばかりを、持寄つてみたところが、結局それ以上に道が開けはしないのだと、彼女達は言つた。彼女達は、心

得のある別な編輯員を入れようと言つた。専門家の加勢を求めようと言つた。さうなつて、仕事が本當に芯へ届くのだと主張した。潰れても、教育雑誌の方なら、まだよい。この仕事に道を求めながら、子供ものを潰して終つたのは、心に恥しいと言つた。國家が経費をかけて、研究の自由を保護してゐる、この学校あたりからこそ、さういふ仕事が出来るのでなければ、本當でないと言つた。考へるなら、今この折だと、彼女は主張した。彼等の殆ど全部は、教育ものの原稿は、勉強しなければ書けないが、子供ものは逆様だと言張つた。会議の時には、そのことで、彼等と彼女達がよく衝突した。殊に山崎とは、何時も口論するところまで行つて、彼女達は引下らなかつた。さういふ時には、京子と澄子が、一番に亢奮した。山崎もそのことは、氣づいてゐるはなしかつた。彼女達も、自分共の態度に、穩當の欠ける場合が多いことに、氣がついてゐた。それでゐて、その話になると、相手とも何時の間にか、喧嘩腰になつて終つてゐた。彼女達は苛々した。さうして、京子と澄子は、編輯の仕事から退きたいと言出した。山崎は、團體の仕事を理解しないと、手厳しく彼女達を叱りつ

けた。それだから、女は女以上のものではないのだと、山崎はその時、大外見を張つた。二人は寄つて泣いた。それからとうとう、彼女達は彼等の仕事に、表面では関係しないことになつたのだつた。

二、

その日の午後、会議の始まる五分ばかり前に、京子は教室の仕事を切上げて、階下の会議室へ行つた。平生だと、その時分には三四人、多くて五六人しか集つてゐなかつた。皆は時間ぎりぎりに、ばたばたと集るのが普通だつた。その積りで、京子はゆつくりと入口の扉を開けた。どうしたのか、その日は殆ど全部出揃うて、椅子についてゐた。煙草の煙と暖爐の温まりとで、部屋の中は朦々してゐた。変に緊張した様子は、会議最中のやうだつた。京子は腕時計を見直した。時間に間違ひはなかつた。静かに歩いて、決つた席につき、椅子にかけた。

女の方も六人とも揃つてゐた。が、澄子は雑誌を開いて見てゐるし、隣ではまた、三人膝を突合せて、呑氣さうに話してゐた。ここだけは、まるで関係のない集りに見えた。

「今日変に様子が違ふぢやありませんか。どうかしたの」

京子は澄子に、小声で聞いた。澄子は雑誌に目を落したま、

「自分達には用のないこと」と、ぶつきら棒に答へた。

「あ、さうか」

京子は、その日の相談は、雑誌の会計のことになつてゐたことに、氣がついた。

彼等の間を、一冊の帳簿が廻つてゐた。その中のことを、自分の手帳に書きとめてゐるのもあつた。二三人、または三四人、こそこそと話合つてゐるのもあつた。その日彼等は総がかりで、何事かを山崎に抗議しようとしてゐるらしい氣色だつた。

間もなく山崎が這入つて来て、会が始つた。別なことの相談で、初め二十分程とれた。その間に、京子の所へ帳簿が廻つて来た。京子は目を通した。積立金の何千何百円といふのが、彼女の目にとまつた。創刊以来の剰餘金を、貯めて出来たものだつた。

「随分出来てゐること御覧」

京子は、そこを指でついて、澄子に渡した。澄子は一寸

見て、後は見ずに次へ廻した。話は愈々そのことに移つた。皆の心が山崎の心に影をうつしてゐるらしく、彼の態度も甚く緊張してゐた。

「支出の部に、×月×日ラケット三十本とあるのは、何のことですか」

と、一人が先づ質問した。

「運動奨励のために、運動部へ寄附しました」

「会議録にさういふことは出てみませんが、それはあなたお一人のお考へから出たことですか」

「われわれの労力は、金銭によつて直接酬いられるべきものではない。それは必ず、一旦子供達の精神を通して、酬いられるべきものです。さう信じてやりました」

「あなたは、あなた御自分の立場を、よくお辨へになつてゐますか。われわれは國家の雇員ぢやありませんか。國家が負擔してゐる学校の経費を、われわれ雇員が支辨しなければならぬ理由を認めません」

「あなたは教育の道徳を辨へてゐませんか」

「あなたは經濟の價値を心得てゐませんか」

「あれが山崎さんの本當の精神だと、力応へがあるんだだけだ」

京子は澄子にささやいた。

「だから結局今日もまた議論倒れで終るんだわ」

と言つて、澄子は袴の紐の間から、時計を出してのぞいた。

「山崎さんのは、とにかく人の目につき易い道具を揃へた興味なんだから」

「あの金なんか、さつさと皆に分けて終へばいいんだけど」

「それがそもそも今日の喧嘩の動機ぢやないんですか。私はさう見てゐるんだけど」

「それから、×月×日〇町までの車賃とあるのは、どういふことですか」

一人がまた質問した。

「病氣になつた子供を、家庭まで見送らせた時の車賃です」

「さういふものは、父兄の負擔でせう」

「僅かなものの請求は、われわれの立場として出来かねます」

「あなたそのことを、われわれに報告なさいましたか」

「今日これからやらうと思つてゐます」

続いて、別な質問がまた出た。それが變なところに拘り出して、却々に連れ込んだ。聞いてゐて京子は、ぼつぼつ

腹を立て出した。

「何て面倒臭いぢやないの。ぐどぐどと」

京子はささやいた。

「こんなことやつてたんぢや、また日が暮れる」

澄子は京子の方へ、椅子をずり寄せながら答へた。

「体裁のいいことばつかり言はうとするからよ」

「ほんとに」

「みんなの心が、ちゃんと見え透いてるくせに」

「男つて割合あれね」

「言つてやらうか」

澄子は話を切つて、山崎の方を見た。そして、

「もう少し様子を見てから」

と言つた。

議論は一時間餘り続いた。陽は暮れはじめ、部屋の中は灰暗（あせ）くなつて来た。皆の興奮は、だんだん險悪を増していつた。山崎は小使を呼んで、電燈のスヰツチをよくするやうにと言ひつけた。彼は、尻を据ゑてかゝるらしい肚を見せた。間もなく電燈がついた。そして、議論がまた続けられていつた。京子はもうじつとしてゐられなかつた。

「言つてもいい」

澄子は肯いた。京子は、胸にあはたらしい動悸を感じながら、話の切れ目を待構へてゐた。そして山崎に呼びかけた。

「積立金の何千何百円は、どういふお積りでございませうか」

「已に御存じの通り」

山崎は京子の顔は見ずに、不機嫌に答へた。山崎はかねがね、その金をさうしておくことが、まさかの時の会員互助の徳に叶ふのだと言つてゐた。

「互助用のものですか、もつと皆の者が有難味を感じる程度に、費ひ切つて終つたら如何でございませう」

「基本金なしで、團体の仕事が出来て行くと思ひますか」

「今時基本金を自慢にしたりするのは、銀行か田舎の婦人会位だと思ひます」

「――」

「つきつめたところ……」

言ひかけて、京子はぶつりと話を切つた。何時もの自分の癖が、ふいとまた出て終つたことに、氣がついたからだつた。京子は、自分でも威圧を感じる程、何時もよく興奮した。その態度が、決して相手の心を不穩にした。京子はそれを心得てゐた。心得るともどかしくなつて、猶苛々し

た。

皆は緊張した顔を、京子の方へ向けた。京子は黙つて、心持目を伏せた。唇が震へて、胸がわくわくして来た。

「ぢや、分けて取つて終はうとでも言ふのですか」

山崎は、強い言葉で京子に言つた。京子は頭を上げて、彼の顔を見た。甚く腹を立て、あるらしく、彼の額口に青い筋が立つてゐた。京子は黙つてゐた。震へて口が利けなかつたからだつた。

「分けて取つて終はうとでも言ふのですか」

彼はまた言つた。

「それも一つの考へ方でせう」

「恐ろしい考へ方です」

「――」

「××主義そつくりな考へ方です」

「さういふことにはかり敏感になるのではなくて、目の前に積んである、その金の費ひ方を、眞面目に考へていただきます」

「賛成！」

と、五六人の彼等が言つた。

京子の意見が、それ程素直に、彼等に認められたのは、

恐らくその時が初めてだつた。山崎は黙つて終つた。そして、俯向いて書類をめくり出した。京子と彼の席は、向ひ合せになる位置にあつた。京子は目を開けて、その彼を見てゐられなかつた。京子も俯向いた。続いてまた二三人、賛成者が出た。京子の目に、涙がにじんで来た。

「よかつたよ。今日は皆も喜んでるらしいわよ」

と、澄子がささやいた。京子はとうとう本泣きになつて、袴の膝に涙を落した。間を置いて、山崎は京子に何か言つた。京子は泣いて終つて、答へなかつた。

彼等の議論に、甚く熱が出て来た。彼等の中で、平生目に立つて仲よくしてゐる三人仲間が、強い言葉で、山崎と議論をはじめた。山崎は一人立になつて、よろよろして見えた。京子は、何か恐ろしい氣がして来た。誰か山崎の肩を引くものが出ないかと、あせつた。さうして、ぐつたりと疲れたやうで、問はれても、碌々口が利けなかつた。京子は椅子に凭れ込んで、ぼんやり休息を求めてゐた。長い時間が経つた。時計を見ると、九時二十分前だつた。京子は倦怠を感じて来た。立つて小用に行き、廊下を二三度ゆききした。白い月が窓から射してゐて、廊下の空気が冷たかつた。

京子は、部屋に戻らうとして、扉に手をかけた。すると内から扉が開いて、澄子がぶいと顔を出した。

「早くいらつしやいな」

彼女は、京子を引張り込むやうにして言つた。京子は部屋に這入つた。彼等の殆ど全部が、手を挙げてゐた。澄子は手を挙げ挙げ歩き、京子にもさうするやうにと言つた。

「こりや一体何の意味？」

「何でもいぢやないの。今日はあなたの大手柄よ」

京子は、山崎の方を見い見い、手を挙げた。そして、席についた。

山崎は、挙げた手の数を数へて、

「二十四、それでは」

と言つて、自分の椅子を少しずり下げた。

「紙」

と、yが向ふ側にゐるSの顔を見て言つた。

「あ、」

と言つて、Sは部屋を出ていつた。また二三人続いて出ていつた。

皆は茶を注いで、飲み出した。yが窓から上体を突出して、熱いのを持つて来るやうにと、小使部屋の方へ怒鳴つ

た。澄子も茶を注いで、近くの人々にも配り、京子にも配つた。Sが、五六枚一緒にして、二つ折りにした紙を持つて、這入つて来た。yが受取つて、シースから小刀を出した。何事が始まるのかと、京子は澄子に聞いた。その積立金の處置を、委員附託にすることになり、これから委員の選挙が始まるのだと、澄子は愉快さうに答へた。知らずに挙げた先刻の手は、そのことに賛成した意味になつてゐた。皆は大体、均等に分配して終ふことに賛成らしい意向だとも、澄子は言つた。京子は甚く心苦しい感がした。今迄、彼一人が握りしめてゐて、手放すことを恐れてゐた会の財産を、皆の力で否認なしに、すつかり吐かせて終ふところまで、話が進んでゐたのだつた。山崎は茶も飲まずに、先刻のやうに書類をめぐつてゐた。

間もなく、Sとyが、小さい紙片を皆に配つた。その金と、そのことに就ての今後の権利とを、山崎の手から奪ひとることに、最も勇敢な一人を、京子も選挙しなければならなかつた。京子は鉛筆を握つて、暫く考へた。さうして、山崎讓と書いた。京子はそれを細かく折り、廻つて来た紙箱に入れた。五人の委員が選ばれることになつてゐた。山崎が最高臈で、その中の一人に交つてくれるやうに

と、京子は思つた。

投票が済んで、開票が始つた。一人が読上げて、一人が山崎の後の黒板に、掲示して行くのだつた。七票が一人、五票が二人、四票三票二票一票各一人、と、七人の名が出た。そして、一票きりの得票者は山崎で、二票のは、京子自身だつた。残りの五人が、委員に選ばれた。山崎は俯向いてゐた。京子も頭を上げなかつた。自分に入れた二票は、誰と誰のものだらうかと、京子は思つた。一票は確に澄子のものだと思つた。後の一票は、若しかしたら、山崎が入れたのかも知れないといふ氣がした。京子は、その投票者を知りたいと思つた。

愈々決つて終ふと、みんな申合せたやうに、静かになつた。勝つた方でも負けた方でも、見せて恥しい心ではないと、互に思込んでゐるのだ。それでゐて、勝ちながらに、一人歎呼する者のない、嚴肅な沈黙だつた。

間もなく、閉会になつた。

三、

一週間経つて、例会がまたやつて来た。前の話は、臨時会で決つてゐたので、其日は差迫つた相談といつてなかつ

た。拾ひ集めた細かい話で、会議は続いていつた。彼等も彼女達も、その日はとりはげ従順にしてゐた。山崎の態度も、平生とは全く別な温厚さを見せてゐた。流れるものが、さりと流れない静かさだが、穏かだつた。

だんだん時間が経つた。最後に山崎は、その一年間に來た、參觀人の報告を始めた。全体で二万八千人あつたといふこと、その人々の各府縣の分布模様、何月が最多数で、何月が最少数であつたかといふこと、一日の平均数、そんなことを報告して、特に西洋人が幾人來たとかと、得意さうに附添へた。京子は、またしても不快なものに、突當つた氣がした。しかし、心得て聞流してゐた。どういふことになつても、その日は穩かな氣持で、押通さうと思つた。

山崎は、いやに敬語を混ぜた言葉で、參觀人には、素氣なくしないやうに、面倒でも親切に、仕事の紹介をするやうになどと言つた。さういつては、ちよろちよると、京子の顔を見た。山崎の目の光が、京子によく読めてゐた。が、京子は応じなかつた。

「參觀謝絶は、なるべくしないがよいと思ひますが、皆さんどうお考へになりますか」

山崎は皆の顔を見廻した。そして間をおいた。誰も応じ

なかつた。

「御都合で時々なされるのは仕方がないと思ひますが」

「――」

「中には、年中「謝絶」の札を掛けつ放しになさる方がありますが、さういふのはどんなものでせう」

それをしてゐるのは、京子一人きりだつた。澄子は、自分の脛で京子の脛を、きゆうと押した。京子は、軽く苦笑をした。或る関心が皆に行渡つたやうだつた。が、誰も目を動かさなかつた。

「馬鹿アね」

京子はささやいた。

「遠慮が過ぎて、下手を打つてるのよ」

と言つて、澄子は心持笑つた。

「でも、今日はもう怒らないでらつしやいね」

「解つてるよ」

京子は、両手を脛の上に突張つて、わざと窓の方に、目を外らしてゐた。遠くから愉快なものに觸れてゐる快さだつた。

「南の二階の皆さん、御意見ありませんか」

京子の教室は、南の二階の突當りにあるのだつた。

「如何ですか」

「――」

「御意見がなければ、一定に決めますよ」

「どうも気軽にやれないで困つてゐます」

とうとう京子は答へた。

彼等は一齊に、皮肉な視線を、京子の顔に集めた。しかし、どれもこれも、好意を持つた光に見えた。京子は、ほつてゐる自分の頬に、手の甲を當てながら、心の穏かさを目に見せて、それ等の視線に答へた。

「さうですか、あなたのは少し極端だと思つて見てゐますが」

「――」

「あれは放課後お帰りがけになりと、札をお掛け代へなるわけにはいきませんか」

「――」

「どうですか。それも出来ませんか」

「左様でございますね。学校の門が閉つてからまで、謝絶の札をかけておくのは、二重の警戒でございますから」

「ぢや面倒でも、そのことだけ忘れないやうに、明日から実行していただきます」

「はあ、その通り小使によく申付けておきます」

皆は、声を合して、どつと笑つた。京子も、彼等に和して笑つて終つた。山崎はさうまでしなかつたが、笑を顔に出すまいとする努力が、六ヶ敷いその表情に見えた。それが面白いと言つて、澄子は京子の膝をたたいて笑つた。

四、

冬休みが明けて、十日程経つた時だつた。空時間に、京子は教員室の席で、書物を読んでゐた。すると、庶務課から使が来て、校長が京子を呼んでゐると傳へた。彼女の方方は、山崎が監督してゐるので、直接校長に用のあることは、減多となかつた。京子の氣持は、一寸緊張した。京子は書物を前箱に入れて、部屋を出た。玄関から植物園を横切つて、校長室のある建物の廊下へ出た。扉の外でノックすると、校長の聲がした。這入つて衝立の脇に立つた。窓際の卓子で仕事した^{マツ}あれた彼が、京子の方を一寸見て、「あ、」といつて、ペンを置いた。

「文部省から辞令が来てゐます」

と、彼は言つた。

こちらの承諾なしに、轉勤や免官になることはないのだ

から、その心配はなかつた。が、他に辞令の来る心當りが、京子になかつた。京子達の格では、文部省の辞令で、旅行に出して貰へることなど稀だつた。稀なその待遇が、京子に来る筈もないし、それにしても、前以つて相談がある筈だつた。若しかしたら、何か仕事が増えるのかも知れないと思つた。校長は書きものの上に文鎮をのせ、書漬しを揉んで、反古籠に入れてから、立つてこちらの卓子の前に来た。その卓子の上には、色々な書類が置いてあるのだつた。彼は、五六枚重ねて別にしてある半野紙の中から、一枚を選びながら、

「あなた今月の×日附で、増俸になりました」

と言つた。京子は変な氣がした。その時分に、京子が増俸になる筈がなかつた。周囲の釣合も、それでは普通でなかつた。京子は、何か皮肉な氣がした。校長は探出した紙を^{マツ}持上げて、京子に読聞かせた。普通は一級づゝ、増されるのだが、京子のは當分級で増されてあつた。當分級といふのは、一級の二分の一額だつた。よく解釈すると、經費の都合だから當分の内といふことになる。が、悪くとると、俸給を小切りに何篇も増して、鞭撻しようとする意味になる。而もここでは、それを使ふのが、普通女の教員だけに

限られてゐた。

京子はお辞儀をして、そこを出た。廊下を歩き歩き、鉛玉を含ませられるやうなことは、厭だと思つた。これを黙つて受取つたのでは、女の仲間に対して、申譯がないと思つた。無論、山崎の申請で、さうなつたのには違ひないが、彼は一体、どのやうなことに氣がついて、さういふことをしたのだらうかと思つた。何れにしても、金銭を方便に使はれたことが、愉快でなかつた。

その日は、澄子にも、他の誰にも、そのことは話さなかつた。

翌る日京子は、自分共の方の事務の係に、増俸になつた連れがあるのかと聞いた。京子一人きりだと、係は答へた。何だか餘計厭になつて来た。さういふことは出来ることかどうか、その辞令を突返してやらうと、思ひついた。その日も、そのことは誰にも話さなかつた。

帰りがけ京子は、美濃半紙を三枚と、同じ紙の野紙を二十枚と買つた。その晩、それを持つて、京子は机に向つた。どういふ工合に書かうかと考へた。日記帳を出して、まづ下書をすることにした。

初めに、「増俸返上届」と、鉛筆でかいた。これは「届」

としてよいものか「願」としなければならぬものかと、一寸考へた。向ふで勝手にして来たことを、こちらで返事する意味なのだから、「願」などいふ、服従的な言葉は、使ふ必要がないと、考を決めた。その次の行に、上から、私儀今回ノ増俸ハ、と書いて、また考へた。後の文句が、調子よく続きさうになかつた。

折角デゴザイマスガ、愉快ナ氣持デオ受ケ出来マセンノデ、始末書ヲ添ヘテ、此段返上 申上マス。

と、考へ考へ続けてみた。妙な届書だと思つた。まあよいことにして、次の行少し下げて、月日を入れ、次に自分の官職名と名をかいた。そして、京子はふつと氣がついた。京子は、宛名にするべき文部大臣の名を、知つてゐなかつたのだつた。抜かしておいて、後で入れることにした。例へはしばしの者であるにせよ、直轄学校に、そのやうな職員のあることが、國家の名譽ではないと思つた。これは自分だけではないやうな氣がした。明日学校で、皆に試験してみたら、一寸面白いと思つた。

次に、始末書を書きにかゝつた。初めに大体の考を決め、順序を立てた。それから、一として、一寸また考へ

た。

私ガ、コノ学校デ仕事ヲシテキルノハ、官督者ト、教育意見ヲ全然同ジウシテキルカラデハアリマセン。ココハ、教育研究ノ機関学校デアルカラニハ、社会ノ安寧秩序ヲ乱スヤウナ言行ヲシナイ限り、仕事ノ上ノ自由ハ、一切保護シテイタダケルコトヲ信ジテ、安心シテ勤メテキルノデゴザイマス。

と書き出した。読返してみても、悪くない気がした。京子の心は落ちついて、自信が出て来た。また三行程続けて、その次へ、

ダカラ私ハ、毎日眞剣ニ働イテキマス。子供ノヨイ道連レニナルコトナラ、健康ノ許ス限り、骨惜ミヲシタリ、力ヲ出シ渋ツタリハイタシマセン。私ノ今シテキルコトハ、私ニハ力一杯デゴザイマス。

と書いた。それで甘く第二項へ続きさうな気がした。適當にその項を結んだ。それから第二項の適當な場所へ、

當分級トハ、人格ノ二分ノ一待遇ヲ意味シタモノダト解釈シテ、間違ツテキナイト思ヒマス。私ハ毎日、自分ノ力一杯ノ仕事ヲシテキマスノデ、僭越デゴザイマスガ、コノ待遇デハ、私ノ心ガ承知イタシマセン。

と書いた。書き書き、面白いことに思へて来た。第三項には、俸給といふものの、京子自身の解釈をかいた。そして第四項に、

私ハ独身者デハアリ、他ニ厄介ヲ見テヤラネバナラヌ累類モアリマセンノデ、今イタダイテキル分デ、大シタ不足ガゴザイマセン。私ト餘リ違ハナイ額デ、妻ヤ子供ヲ連レテキル方ハ、暮シニサゾ困ツテキルコトダラウト思ヒマス。同ジク身ヲ官ニササゲナガラ、カウイフ不平等ナ生活ノ保證ヲ受ケルコトハ、同僚ニ対シテ、心苦シウゴザイマス。

と書いた。さうして、

今度私ガ、カウイフ待遇ヲ受ケタカラト申シテ、ソノタメニ心ヲ乱シタリナドイタシマセン。イツカ周囲ニ憚リナク、私達女モ、一人前ニ待遇シテイタダケル時節ノ来ルコトヲ信ジテ、ソレヲ樂シミニ仕事ヲイタシマス。ソノ時節ノ一日モ早く来ルヤウ、骨折ツテキテ下サルアナタデアルコトヲ、信ジサセテイタダキマス。兎ニ角ソレマデ、今回ノ増俸ハ才預ケ申上マス。

として、第五項を結んだ。これを大臣に読ませるのだと思ふと、一寸愉快な気がした。鉛筆をおいて、階下へ茶を飲

みに降りた。上つて文章を直しにかかった。それから筆と硯の用意をして、届の方は白紙に、始末書の方は罫紙にかくことにした。十一時過ぎまでかかつて、書き上げた。状袋に入れて、封はせずに、明日持つて行く風呂敷包みに入れた。暫くすると、大阪へ遊びに行つてゐた従妹が帰つて来た。土産に買つて来てくれた、バナナと蜜柑を、二人で喰べた。

京子は、先刻の風呂敷包みを持つて、寢床にはいつた。腹匍ひになつて、その届をもう一度読んだ。言ひたいことは、大体言へてゐる氣がした。明日になると、それを先づ山崎に出す。山崎は読んで、判を押して、校長に届ける。校長は読んで、判を押して、さて、どうするだらうかと思つた。こちらから申請して、辞令を求めておきながら、またそれを突返すといふ届書には、彼等は、減多なことでは、判を押すまいと思つた。押して終へば、次に起る問題が、知れてゐると思つた。それは別として、第一山崎が、それをどう處理するだらうかと考へてみると、一寸面白い氣がした。彼のことだから、負けた顔は見せぬと思つた。といつて、叱つて取下げのわけのものではなかつた。今更、京子と打解けた談話をして、理解を求むることも、彼

としては、容易なことではあるまいと思つた。例へそれが、先の先まで届かないにしても、山崎の反省さへ促せたら、それでよいと思つた。何か勇敢な氣持になつて、京子はそれを風呂敷に入れた。そして、電燈を消して、眠りについた。

五、

届は出した。が、その結果は、甚だよくなかつた。Sが仲にはいつて、京子の方で取下げることになつたのだが、山崎はそれつきり心の扉を閉ぢ、門を入れて、京子をよい目で見なくなつた。彼は京子の仕事を、積極的に邪魔はしないのだが、一切保護しなくなつた。京子のすることに、一々目をつけ、小さい落度にも引つかつた。不愉快な日が、一年餘り続いた。京子は、彼との交渉を最小限度に減らして、自分だけの仕事をするやうに頑張つた。せつば詰つた相談が起つた場合には、一寸困つたが、京子は、彼の卓子の傍に行つて、不愛嬌に一寸頭を下げた。彼は仕事の手をやめて、頭を上げ、京子の顔を見ると、決つて苦い表情をした。さうされると、京子の方で、尚頭が下げられなかつた。わが心が淋しかつた。しかし、彼との交渉の少い

その生活が、慣れると却つて楽しかつた。

そのうちに、流行の教育は、だんだん下火になつていつた。雑誌の賣行部数は、月々に減つていつた。參觀人も少なくなつていつた。彼等は、久しい間忘れてゐた競技の稽古を、また始めるために、放課後になると、運動場に出るやうになつた。京子は、夜、時々彼等の中の誰かと、街で出逢つた。珍らしいことだと思つた。妻や子供を連れて歩いてゐるのを見ると、見慣れなくて、変な氣がした。彼等と彼女達の喧嘩もなくなつた。さうして、これといふ動機は何もなしに、京子と山崎の心も、歩み寄るべき所に、何時の間にかちやんと落ちついてゐた。山崎は時々、京子を自分の席に呼んで、仕事の相談を細かくした。京子の希望を、山崎は素直に受け入れた。京子も従順にした。さうなつてみて、お互にお互の心が解り出したのだ。二人は屢々談笑して、好意を持合つて別れた。

東京の本屋からは、手紙が来たり人が来たりして、子供雑誌の返品が、二分の一もあるといふこと、両方とも不景氣になつたのでは、欠損の埋合せがつかないから、子供ものの方は、是非とも何とか考へて欲しいと、引つきりなしに、交渉して来た。彼等と彼女達は、幾晩も集つて、その

善後策を相談した。今となつては、彼女達の仲にも、それみたことかと言ふ者が、一人もなかつた。しかし、彼等にも彼女達にも、勞れが顔に出てゐた。引続きに、その運命を立直さうとする元氣が揃はなかつた。とにかくにも子供ものを潰して、過去と未来の境界線を引かうと、相談がまとまつた。線は引かれた。さうして、彼等も彼女達、休息へ休息へと、携へて静かな椅子についた。

運動会のあつた晩、山崎は彼等と彼女達を、ある料理屋に招いて、支那料理をおこつた。彼等は酒を飲んで酔うた。京子達ものんだ。その後で、山崎は、京子達を対手にランプをした。彼の白髪が、何と優しい爺さんに見えたことか。今迄、写真だけで見てゐた彼の風貌と、びつたりした彼を、京子は見た氣がした。

「山崎さんも變つたねえ」
と、京子は澄子に言つた。

「私達も變つたねえ」
と、澄子は答へた。

だが、京子は、何か物足りなかつた。一切が平和過ぎて、怠るかつた。過去つた月日を観ると、あの頃の苦痛が、どのことも、張合のある愉快に思へて、懐しかつた。

六

その頃から、京子は変に身体の氣力を失ひ出した。仕事に熱がかゝらなくなつた。人とゐる時は、まだよかつた。一人になると、淋しくて、何かなしに涙が出た。空や山を眺めてゐると、何時の間にか、泣けてゐた。午後になると、少し熱があるやうで、夜はぴつたりと寝汗をした。どうも普通でないと思つた。思ひながら泣けて、只、不安だつた。夜、寢床の中で、車井戸の音を聞いては泣いた。大佛の鐘を聞いては泣いた。泣ける自分が腹立たしかつた。そして苛々した。京子は、前に肋膜炎を病んだことがあつた。どうも、その症状に似てゐる氣がした。食事が進まないといふ程ではないが、量る度に、目方が少しづつ、減つてゐた。

京子は時々、学校の時間に遅刻しだした。欠勤もした。休んで引込んでゐる程のことはないのだが、起きるのが憶劫だつた。山崎は氣にかけて、用心するやうに、用心するやうにと言つた。遅刻しながら、ゆつくりゆつくり階段を上つて行く途中で、校舎を見廻つてゐる彼と、ぱつたり出喰はずこともあつた。山崎は今迄のやうに、その場で、京

子の顔と自分の腕時計を見合せるやうなことは、決してしなかつた。京子は、医者に見せるのを恐れた。前の病氣が再發したものなら、それから七八年も歳をとつてゐることだし、今度は治らない氣がした。しかし、それでは職業柄、無責任な氣もした。

延ばし延ばしした揚句に、或晩、かかりつけの医者の家へ出掛けた。容態を細かく言つて、氣にかかつてゐる病氣のことも話した。

医者は、まづ熱と脈をはかつた。それから目を診た。舌を出させて、喉の奥まで調べた。胸を診た。聴診器を上の方に當てたり、乳の下の方へ當てたり、静かに静かに、中の動きを聞きとつた。そして、小首をかたむけた。京子は、半分泣きさうになつた。その瞬間、目にも見えない黴菌の集團位に、自分のこれ程大切な道具を、易々喰はせて終つて堪るものかと言つた、凄い力応へを感じた。感じながら、腐りのはいつた、夏蜜柑を見る氣がした。彼が今傾けた小首は、黒く腐れかけたそこに、聴診器がふれたのであるまいかといふ氣がした。彼は京子を背中向けにした。左の脇下に、何篇も何篇も、冷たい道具を當て、ぼんぼんと、指先でたたいた。

「いかがでございます」

待切れなくなつて、京子は聞いた。

「濁音は聞えますが、今のものぢやありません」

「よく御覧になつて下さい」

「御心配はいりません。大丈夫です」

京子の目に、また涙がにじんで来た。

彼は帯を解かして、京子を寝台に寝かせ、腹を診た。それから、腰をかけさせて、金槌のやうな道具で、脛のところを打つて診た。

「通じは？」

「大抵毎日あります」

「病氣はどこにもありませんがね」

二人は対ひ合せに、椅子にかけた。

「夜よく眠れますか」

「眠るのは眠りますが、飛行機で飛んで歩いたり、エレベーターの上から、おつこちたり、不安な夢ばかり、朝まで見続けます」

「神経衰弱です」

「……………」

「診断書をかきませう。一月ばかりお休みなさい。氣を楽

に持つて、美味しいものをお上んなさい。すぐ治ります」

さう言へば、京子はこの頃、頭が萍のやうに、ぼうつとしてゐた。朝聞いたことでも、晩には忘れてゐたりした。

京子は、神経衰弱は初めての経験でなかつた。しかし、それには氣がついてゐなかつた。

彼は京子に、その病氣の起る原因や養生法について、細かく話した。戦争中には、さういふ病人は殆ど出ないが、戦争が済んで、除隊になると、よくそれを病出すものだといふこと、それに似た統計的な話もした。

「軍隊では欺病といつてますがね」

「————」

「無理をしないで、甘えてゐる方がよろし」

京子は、診断書と薬を貰つて、医者の家を出た。歩き歩き、珍らしくひとり、で、に笑へた。

【解説】

執筆時期 この作品は、B4版20×20の、商標、所属など一切ない原稿用紙に書かれており、前号（「りずむ」六号）に紹介した「池田小菊未発表原稿「朝顔」」に用いられているのと同じ原稿用

紙が使われている。本作と同じく女教師「京子」を主人公とし、彼女と彼女の姪と従妹との三人の女所帯を描いた「朝顔」と、「京子」の勤務先である学校での女性の地位や人間関係に焦点をあてた本作「落葉」は、ともに作者の訓導時代を素材としている。つまり、小菊の奈良女子高等師範学校（以下、奈良女高師）附属小学校訓導時代の、家庭と職場における感慨をそれぞれ写したような作品であり、両作は己の教師時代を総括するような意図をもって、近接して書かれたと考えられることは、前号「朝顔」の解説で述べた通りである。時期を確定できる情報を、若干補足しつつ、今一度確認しておく。前号の「朝顔」解説の中で触れたように、本作「落葉」では、京子という女教師を主人公にして、自由主義教育の評判や限界、子供雑誌の廃刊の経緯などが書かれている。作者である池田小菊の大正十年二月から昭和三年三月迄の七年間にわたる奈良女高師附属小学校訓導時代に取材した作品である。作中に登場する廃刊になった雑誌は奈良女高師附属小学校内学習研究会から出されていた子供雑誌「伸びて行く」であり、大正十年に創刊され、小菊の退職する年度の昭和二年十二月号を以て廃刊になっている。作中の「山崎」は、奈良女高師附属小学校の主事木下竹次をモデルとしている。冒頭の、山崎に女の子が出来たというエピソードを、木下の実生活に照らし⁽¹⁾と、昭和元年に長女和子が誕生しており、冒頭の作中時間は昭和

元年とみられる。また、作品の最後に出てくる京子の病氣は、池田小菊「父母としての教室生活」（昭和四年十月 厚生閣書店）の記述によれば、昭和二年から三年にかけての冬のことである。以上の事実と、先に述べたように、自身の訓導時代を総括するという意図から考えて、この作の執筆時期は、小菊の退職後昭和三年頃と考えてよいだろう。小菊の訓導時代である大正十年二月から昭和三年三月迄の七年間には、兄や父母の相次ぐ死があり、その後、朝日新聞に連載される『帰る日』（大正十四年五月一日—七月二十九日）の執筆・掲載が大きな出来事として挙げられる。他作品でこの時期を扱う際に必ず触れられる、身内の死や、『帰る日』について、この両作では触れられていない（『朝顔』には母が亡くなっていることは出てくるが身内の相次ぐ死という形ではない）。「朝顔」では、姉妹愛や、結婚^{シスターフッド}、「職業婦人」への偏見に対する懸念など、女性にまつわる問題が描かれ、本作では、職場での「彼等」と「彼女達」の対立や女性教員への差別、自由教育の退潮などが描かれ、両作においては、作者個人の問題よりも、社会とそこに身を置く女性の問題を描いていると言えるだろう。そこには、大正末の社会主義思想の影響や、自由教育が圧迫され息苦しくなっていく時代の空気がかかわっていると見ること⁽²⁾もできよう。

木下竹次と、小菊の教員生活 作中の山崎のモデルである木下竹

次（明治五（一八七二）年―昭和二十一（一九四六）年）は、福井県生まれ、福井県尋常師範学校卒業後福井県で教職に就いたのち、高等師範学校に入学、高等師範学校文科卒業後、奈良県師範学校、富山県師範学校、鹿児島県師範学校に勤務、鹿児島県女子師範学校校長、京都府女子師範学校校長などを歴任し、大正八年、四十八歳の時に、奈良女高師教授、奈良女高師附属実科高等女学校主事、奈良女高師附属小学校主事として着任する。木下は、それまでの教授万能主義に代わって新教育運動として生まれて来た生徒の個性尊重・自学自習の精神に基づく創造的学習法である「台科学習」を、奈良女高師附属小学校を舞台に展開した。その活躍は目覚ましく、著書『学習原論』『学習各論』、雑誌『伸びて行く』『学習研究』により、広く多くの共鳴者を得た。本作にもあるように、附属小学校には多くの参観者が訪れ、大正九年度が四、一八八名、大正十年度が六、五三二名、大正十一年度が一、〇〇〇余名、大正十二年度は二〇、〇〇〇名を超えたとい⁽³⁾う。小菊は木下に招聘されて大正十年に奈良女高師附属小に着任する。その事情について、戦後書かれた草稿では次のように述べられている。文中の「お淳」が小菊に重なる人物である。

当時、女高師の附属の主事に、木本信吉といふ革新派の老教授がゐた。齢は五十出たばかりだったのだから、老人といへなかつたかもしれない。生徒肌な、俗気の少ない人で、已に

そのころから眞白い髪を五分苳にしてゐるのが、白い千日紅の花のやうで、その人らしく似ついで清廉な感じがしたものである。その老教授が、やはりそのころ、米國マサチューセツト州、ダルトンの中學校で実施してゐた、パークースト女史の實驗室案「ダルトン・プラン」に共鳴し、その新教育法を日本に移入し、日本の教室でも実施できる學習法案、「奈良プラン」創案の計画をたて、お淳を試験台にやらせてみようといふので、お淳が「特別教室」を与へられ、招かれることになつたものである。

当時若かつたお淳は、奈良に来て、こゝの古寺や古美術に心惹かれる以上に、こゝの山野に棲息する動植物に好奇心を持ち、奈良といふ土地の、自然と歴史が一つに溶けあつた風物の美しさに、どんなに輝しい夢を抱いたことであらう。お淳が和歌山の郷里で教員をし、歪められた、人間鑄造的な、日本の劃一教育に懐疑を持ち、教育を教師と子供の手に返してもらひたいことを、ときどき教育雑誌や新聞に発表した。お淳は知らなかつたが、さうしたお淳の希望が老教授の気に入つてゐて、この場合、それがお淳と老教授を結ぶ機縁になつたのだから。老教授がお淳によこした誘ひの手紙に「寧楽の都に活火山あり」といふ、青年のやうな熱意の言葉があつたのを、お淳は、三十年後の今も忘れない。（草稿「小説の

神様』『九輪草』)

戦後復刊された『学習研究』五号(昭和二十二年六月)掲載の「私の教員時代」という小菊の回想記は、本作と同時期を素材としているので、本作の内容と重なる部分が多くある。自分の赴任当時のこと、木下の印象、職員室の雰囲気、そして、本作後半に登場する「増俸返上届」⁴⁾にまつわる件も書かれている。戦後に書かれたものであり、また、前年二月に木下が亡くなっているので、この回想には木下追悼のトーンを読み取ることができる。例えば、木下の人物像について「なかなか研究好きな学者で」「お酒も煙草も召し上らない」「自然社交性に乏しく、人事に干渉しないこと、全く清流に住む魚といった」⁵⁾「冷たい感じの方」だが、「人事に関したいざこざが本当に起らなかった」のは「木下氏の人物の影響が大きかった」とその人柄を偲んでいる。また、当時の教員が木下の影響を受けて非常によく勉強したことを述べ、勉強したことを持ち寄って「朝からもう議論」で、「燃えるものを持つた人たちの、盛大な集まりだった」、「大体がそんなふうでしたから、皆もさう易々と木下氏に頭を下げませんでした。下げないからといって木下氏はそれに拘泥しませんでした。さういふところ、あの人はやはり偉い人だったと思ふのです」と評価する。「増俸返上届」に関しても、届を取り下げることになったが、翌年の年度替わりに増俸して結局一級増俸を果たしてくれたことに

触れ、「やはり、こゝは女高師だけあつて、校長も主事も皆人物が大きいと思ひました」と結んでいる。また、本作では触れていない『帰る日』掲載にまつわることも述べている。これは『りずむ』創刊号に紹介した「思はぬ旅」の解説の中に引用した「心境」という草稿にも出てくるエピソードだが、『帰る日』は恋愛小説であり、女高師附属小訓導という立場でこのような小説を連載するということに対して批判があった。それに木下が対応せねばならない事態となり、迷惑を掛けられないと思った小菊は辞職を申し出る。それに対して木下は、「退めてよいときは、僕からいひますから、外部の人がどういほうとも、そんなことにびくびくしないで、落ち着いて研究をつづけてください」と、不問に付したという。この件について小菊は「救はれた思ひがして、木下氏はやつぱり偉い人だと思ひました」と結んでいる。この「私の教員時代」の回想と本作を比べてみた時、本作での木下への反発が、回想では見られないことがわかる。もちろん、時間の経過と木下の没後という時期が、「偉い人」という評価につながっている部分もあると思われるが、しかし、少なくとも「帰る日」に関わる木下の対応は、当時においても小菊に木下の見識の高さを認識させたと思われるのに、そのエピソードが本作では省かれている点は、注意すべきだろう。

『落葉』というタイトル 仕事に厳しかった木下の教育への情熱

に應えるべく教育の仕事に取り組んだ小菊であったが、木下の教育観に批判的な目を向けるようになる。

私には、もつと他にも木下氏のご意見と一致できない、私個人の考へがございました。例へば、木下氏は、教へることは一切しないで、何もかも子供の学習にまかせ、教師はその指導者であるべきだと、さう御主張なさいました。むろん教育の主張としてはそれでよいので、それに間違ひがないのですが、実際の授業をその流でやつていきますと、文字の筆順も教へてならぬこととなります。それで、私達の教室を先頭におひおひ学習法実施の級がふえるにつれて、一種の女高師字といふのができてまゐりまして、子供が字をかくのに、先にツクリを書いて後からヘンをくつつけたり、田といふ字をかくに、先に十をかいて後から口でかこんだり、おかしなことが流行になりました。木下氏は、それでよいので、さうして間違つて習ふことを、それを間違ひだと、その間違ひを指導するのが「学習法」だと申されました。が、私は、字を書くのに、ツクリから書いてみたりヘンから書いてみたりしたところで、その中からは創造も発見も生れない、創造や発見の生れないことに、時間と労力を費すのは馬鹿骨折りで、文字の筆順のやうに已にはつきり約束のきまつてゐるものは、学習だからといつて、その約束を隠してして子供を釣る必

要はないので、かういふことは最初から約束どほりの正しいことを教へればよいのだと主張いたしました。(私の教員時代)「再刊『学習研究』五号 昭和二十二年六月)

小菊は、『父母としての教室生活』(前掲)の中で、「私が奈良に來たのは大正十年の一月だった。学習法が今これから雄飛しようと言ふ時で、学校の中は大した熱のか、り方だったものだった。さうして流行全盛の様子を見、続いて没落の姿を見たのだが、流行も流行、よくもあれ程流行つたものだと思ふ程、学習法も一時は素晴らしい景氣だった。だが、今のさびれ方と來たらどうだらう」と述べ、そして、学習法の衰退の原因が、演繹的で論理的計画的に教育をすすめようとする木下の方法重視の在り方にあると見ている。⁽⁶⁾「寧樂の都に活火山あり」という木下の熱意に應えて奈良にやつてきた小菊であるがゆえに、木下の学習法の欠点を感じ始め、学習法がさびれていくのを見ることは、齒がゆく、失望を感じるものであつただろう。そして、だからこそ木下に反発を覚えていたのである。

会議の場面で、雑誌の会計を巡つて山崎と他の教員が対立することが描かれる。大正十四年十二月十一日の「職員会記録」には、学習研究会会計のことが議題に上つており、「研究会は学校の発展を図るためであるから、個人の利益を主として会の発展を後にすべきでない／雑誌は商品であるから会を私設営利会社とせ

よ云ふ意見は穩当でない」などの言葉が見える。そして、その後、学習研究会の規約が検討され、「庶務会計部を一心する意見多数／委員数五名 選挙説多数」とあり、庶務会計部の委員五人を選挙で選ぶことを決定している。本作においても選挙で委員五人を選んでいること、また作中の会議が「九時二十分前」という夜になっても終わっておらず、記録でも「午後三時半より全八時十分まで」と長時間になっているなど、十二月十一日の実際の会議におけるやり取りが作中に反映されている可能性がある。⁽⁷⁾「山崎は一人立ちになつて、よろよろして見えた」「金と、そのことに就ての今後の権利とを、山崎の手から奪ひ取る」などの表現から、山崎のやり方に皆が異を唱える会議の様子を描くことは、山崎の力の衰退を示すものだとと言えるだろう。一方、皆から反対を受けても、それに拘らず、次の会議では、参観人数を報告したり、参観謝絶をしないようにと説いたりする山崎は、自分の教育信念を守る人物であり、頑なでもある。支持を失いつつあるように見える山崎が京子にだけ増俸の手続きをし、それが当分級で半人前の増俸という扱いであったことは、京子にとって、姑息な手段で自分を取り込もうとする、それまでの実直な山崎の変節のように見えるのかもしれない。⁽⁹⁾参観人も減り、「流行の教育は、だんだん下火になつてい」き、子供雑誌の売れ行きも落ちて廃刊となる。⁽¹⁰⁾山崎は好々爺の趣を見せ、「山崎さんも変つたねえ」「私達

も変つたねえ」という感慨が語られる。先の『父母としての教室生活』の引用にあるように、小菊の訓導時代は、そのまま学習法の全盛から没落をたどる道のであった。「落葉」というタイトルは、奈良の学習法の熱気の凋落を示すものであり、それは、また、山崎、すなわち木下の凋落でもあった。凋落を描く方向性の中で、木下の「帰る日」の対応に見られるような、「偉さ」を示すエピソードは省かれ、彼の教育にかける情熱を頑なさとして戯画化していくことを通して、山崎という人物が造形されているのではないだろうか。

学習法の熱気の衰退は、小菊の批判のように、学習法を展開する方法論に問題があったのかもしれないが、もつと時代に関わる問題でもあった。長岡文雄（注(7)参照）は、学習法は、大正十一年から十三年度の一学期までが上り坂で、大正十三年度の第二学期からは「外からの批難を受け、守勢に立つようになつた段階」であったと指摘している。以下に、文部省からの圧力が加わるようになったことを示すものとして長岡が挙げている事例を改めて「職員会記録」から紹介すると、吉田熊次博士の「適當なる時に適當なることを知らせねばならぬ」「自分の好まぬこともせねばならぬ場合がある」という「教授といふ考」からの自由教育への批判的意見（大正十三年十月三日）、督学官の「特設学習時間⁽¹¹⁾を二時間とすることは多きに過ぎる」という発言（同十一月七日）、

文部省視学講習に於いて「新教育は採用すべきものでない。／奈良では生徒と教師とを平等に見ているからいけない。／教師を環境と見るのはいけない。神を環境と見るのはいけない。／奈良は法令を無視する。／修身教科書を用ひない」など「本校を批難するものがある」（大正十五年一月八日）という記述などが挙げられる。自由を圧迫する息苦しさが続いてくる中、見かけ上の「平和」な日々が訪れる。京子が職を辞すかどうかは書かれていない。しかし、医者に「神経衰弱」と診断され、「除隊」になると病みだす人が多い病だと言われた彼女は、すでに戦線離脱しているのだ。「増俸返上届」を認め、「彼等」と「彼女達」との違いに、すなわち、女性の不当な扱いに憤る気概は此処には見られない。京子こそ意欲を失い凋落する「落葉」だった。

本作は、時代の空気の変化を自由教育の凋落という形で感じていたであろう小菊の、奮闘の末、職を辞すことになった自らの訓導時代の総括と言えるだろう。時代は大正十四年治安維持法が成立し、大正デモクラシーもまた「落葉」の時期を迎えていた。山崎や「彼等」に反発を感じることができた時こそが、自由な、充実の時であったという感慨は、戦後、「私の教員時代」で「落葉」の時代を回想する時、小菊にとって重みと苦さを増してよみがえるものであっただろう。

(1) 注

木下亀城「木下竹次の生涯―木下竹次とその周辺―」（木下亀城・小原國芳編『教育の探究者 木下竹次』昭和四十七年三月 玉川大学出版部）によれば、木下竹次には、長男哲男（明治三十四年生）、次男勇次（明治三十八年生）、三男由己（明治四十三年生）、四男誠之（大正二年生）、五男学（大正十二年生）、長女和子（昭和元年生）の五男一女があった。作中の中二の「健三さん」は四男誠之のことか。由己と誠之は奈良女高師附属小学校の卒業生である。前号で「小説の神様」の草稿「九輪草」にも木下の家に子供が生まれたことが取り入れられていることを指摘し、本作との共通性を述べたが、木下が五十歳を超えてからの子供の誕生という出来事へのまなざしは共通するものの、「九輪草」のほうは五男学の誕生、本作では長女和子の誕生が話題になっていると考えられる。本作で語られる子供の数は事実と対応しないが、作品化にあたって意味があったのは、上の兄弟と離れて子ができたということだったと思われる。

(2)

『父母としての教室生活』には、昭和三年三月に卒業させた子供たちとの「六年目にか、つた」「その年の冬」「私は病気をし」たと記されている。草稿「心境」（「教師を辞める」とも）にも「学校を辞めることに肚がきまると、気がゆるんで、からだの弱りがいちどに出たのか、教室で板書をしながら貧血が来て倒れたり、最後の年の三学期は、出

- (7) たり引つこんだりになつてしまつた」とある。
- (8) 年度ごとの参観者数については、奈良女子大学附属小学校『わが校百年の教育』（平成二十四年十二月）による。
- (9) 問題となつている当分級だが、奈良女高師の人事の記録では「当分」の記載は確認できなかつたが、回想記に述べていることから、虚構ではないと思われる。
- (10) 戦前の『学習研究』最終号（昭和十六年三月）は、木下の退職記念号の形にもなつているが、そこに書かれたゆかりの人々の送別の辞からも、木下が「冷たい」ほどに厳しく仕事一筋であつたことが窺える。「公私を峻別された方」（池内房吉、「冷蔵庫」というニックネーム）さえあつたが、そこに「敢然新教育を提唱し実践して天下の教育をリードした強い力が存在する」（石瀬六郎）、身内が危篤で会いに行きたいと申し出た時、「明日はどうするのです」と木下に言われ、自らの職責を知つた（小笠原未知嬭）、などエピソードが見える。
- (11) 小菊が木下の教育観について、彼の演繹的な進め方に反発を持ち厳しく批判していたことは、前号の解説の注(1)を参照されたい。
- (12) 会議の内容については、会議録の調査をもとにした研究である長岡文雄『学習法の源流 木下竹次の学校経営』（昭和五十九年一月 黎明書房）に多くの引用があるが、本稿では、長岡の著作に学びつつ、大正十一年度から昭和二年度までの「職員会記録」を奈良女子大学附属小学校で閲覧
- (13) させていただき、それに基づき引用している。
- (14) 「参観謝絶」についても「職員会記録」に記されている。大正十五年二月十二日の項に、「参観謝絶は一時間単位とすること」「終日参観謝絶の如きはないやうにしたい」「礼を直すことを忘れぬやうにする」という文言が見える。
- (15) 当時の女性教員が待遇面で男性教員と比べて差別されていたことは、女子師範、専攻科を卒業し大正八年に教職に就いた愛媛の波頭夕子さんの「男の教員と比べても女教員は俸給もボーナスもずっと低かつた」（重松敬一・丸岡秀子編『女教師の先輩と後輩』昭和四十二年六月 明治図書）という話や、「学校の修業年限は、男子と同一であり」ながら「経済的には月給が男子よりも少く、道徳的には男子に許されることが女だからと云つて罪となり、何十年真面目につもめても男子の様に校長になることが出来ない」（金子りき）（『職業婦人』としての私の不平 不満 抱負 喜び 希望！ 『職業婦人』創刊号 大正十二年六月）など声を拾うことができる。
- (16) 作中に「彼等と彼女達は、幾晩も集つて、その善後策を相談した」とあるが、「職員会記録」を見ると、昭和二年の九月十六日以降、九月、十月は、毎週の会議で「伸びて行く」のことが議題になつている。
- (17) 学習者が、「独自に学習の材料と場所と用具と指導教師とを選定して学習をする」（木下竹次『学習原論』）時間。木下の求める自律的自発的な学習の展開のうえで非常に重要

な時間。

※本稿執筆にあたって、奈良女子大学附属小学校に資料閲覧で大変お世話になりました。深く感謝申し上げます。